

神戸建築学は、著名な建築家や研究者等を講師としてお招きしてご講演頂く講演会である。講演後には講師と神戸大学の院生・学部生との自由な討議の機会を設け、新たな環境創造における建築学の可能性を探る機会として開催している。2024年度では第51回目となる講演会を建築家の西沢大良先生をお呼びして行った。

神戸建築学 第51回

「現代建築のつくり方」

西沢大良 西沢大良建築設計事務所

1964年東京都生まれ。1987年東京工業大学工学部建築学科卒業。1987年入江経一建築設計事務所勤務。1993年西沢大良建築設計事務所を設立。2013年～芝浦工業大学教授、2024年～法政大学客員教授を務める。主な作品に「大田のハウス」(1998年)、「諏訪のハウス」(1999年)、「砥用町林業総合センター」(2004年)、「宇都宮のハウス」(2008年)、「駿府教会」(2008年)、「直島宮浦ギャラリー」(2013年)、「今治みなと駐輪施設」(2016年)など。主な受賞歴に、住宅建築賞金賞(2001年)、日本建築家協会新人賞(2006年)、AR-AWARDS 最優秀賞(英国、2005年)、BARBARA CAPOTINE 国際建築賞(イタリア共和国、2007年)、ART & FORM AWARDS 最優秀賞(米国、2009年)ほか。

[日時]

2024年12月26日(木) 17:00～19:00

[司会・進行]

槻橋修(教授) 堀内啓佑(助教)

[担当学生] ◎:代表

◎延近佑澄 丁子紘亙 柳内あみ 宇野耀士 大内崇弘 石黒萌夏 金谷百音 泉貴広 菅原慎司 松下敦紀 宮田耕太郎(M1) 田中良征 玖村直哉(B3)

[参加者数(概算)]

40名

1.はじめに

今回西沢先生には、3つの特徴について2作品ずつ、合計6作品を通して、設計の思想やプロセスを説明いただいたが、本稿ではその思想や、特に多く言及されていたプロジェクトの要点を抜粋させていただきたいと思う。

2.講義概要

2-0. How to create contemporary architecture

近代建築「modern architecture」に対して、現代建築を「contemporary architecture」とする。近代建築ではなかった3つの特徴がある。

How to create contemporary architecture

Not only artificial but also natural

Not only realistic and also magical

Not only large numbers but also many varieties

現代建築のつくり方

「人工的」であるだけでなく「自然物」でもある

「現実的」であり「魔術的」である

「数が増えた」だけでなく「種類も増えている」

左かつびのみを行ったのが近代建築であり、非常に人工的であり現実的かつ大量生産である。右かつびと両天できると、完全に異なる建築＝現代建築のつくり方が明らかになるのではないか。

2-1. Not only artificial but also natural

砥用町林業総合センター

熊本県の林業のまちの体育館。砥用町が美里町と統廃合される際、誰も実現できなかったような木造の建物をつくれば、将来世代が木材・材木・林業に興味をもつだろうと考え設計した。敷地は、山に囲まれているが造成地にある。結局、建築が建つところは、人工的な改変が施されている認識である。林業の山の中だから自然のことだけを意識するのではなく、人工物と自然物の両方に答えるような建築をつくるのが、より建築の本質的なことではないかと考え、2面性を建築でうまく伝えることを意識した。材木で森の茂みのような架構をつくり構造体としてガラスの箱の中に納めることで、自然物なのか人工物なのかかわからない状態をつくりだした。構造は木造とスチールの混構造。工法的には、コンクリートを一切使わず、鋼管杭とし、地中梁ではなくH鋼を代用して地上梁とした。床下は砂利と防湿シートのみ、玄関は鉄板敷とした。木の架構については、地元のスギ材を用いて、トラス通りを4本設ける。天井高の必要な箇所はトラスの成を低くし、天井高の低い箇所はトラスの成を高くする。トラス通りに対して、45度角度を振った上弦材を介して、複数のトラスが交点の部分で力のやり取りをしながら成立するような、強いところと弱いところが支えあう構造とした。架構のピークが3箇所あることで、3つの部屋があることを表現することができ、立地・建物の内容と無関係に構造が成立しスパンのみを表現する近代建築とは大きく異なり、一歩前進した。

沖縄KOKUEIKAN

沖縄県の「国映館」という映像館が入る商業ビルの建て替えのプロポーザルの提案。沖縄の空の青さ・海の青さ・緑の強さは一生記憶に残るが、商業ビルは記憶に残らない。沖縄の方々はガジュマルの木陰で休むのが好きである。木陰の下で休憩したり、買い物したり、食事したり、自然界で起きている状況を体験できる商業ビルを提案した。階高10m、3階建て、高さ30mのビルとし、外側を緑で覆うかたちとした。天井から4.5mくらいのところまでをガラスのサッシがめぐることで、天井の向こう側に緑や空が垣間見えたり、風が吹いたりする。沖縄特有の空の青さとか緑の強さとかを肌で感じながら、休憩したり、買い物したり食事できる状態に近づいた。また、多くの商業ビルが人工的につくられるが、飲食店や物販店の商業活動は、季節によって売り物が変わったり自然界にものすごく依存していると考え、テナント募集時には、各テナントのデザインやインテリアの条件は、「沖縄の自然がわかる」というものにした。

2-2. Not only realistic and also magical

駿府教会

静岡県にある木造の教会。礼拝堂の外壁に無塗装の匏をかけていないレッドシダーの割り肌板を凹凸をつけて張っている。キリスト教プロテスタントの教会のため、塗装はせずに自然物だけであるべく腐らないようにしたかった。レッドシダーの腐食性・抗菌性により腐りはしない

が、無塗装で暴露していれば、太陽の光で炭化するため、最終的にブラックシルバーみたいな色となる。外壁面と並行に光が落ちる時刻になると、光と影が入り乱れる状態になり、光に反応する外観となった。礼拝堂の内部は、人工照明がなく、環境音が聞こえない中で、聖書が読め礼拝できる状態を目指し、光と音をコントロールした。内壁は無塗装のパイン材を90mm幅からはじめて、18mmの幅になるまでピッチを調整し、目透かし張りとした。光の効果により、ルーバーの奥の構造のトラスが、時刻によって見え隠れする現象は魔術的である。礼拝堂の内壁の板張りが6割ほど完了した頃におもしろいことがあった。職人さんたちが、自然界でいうと、猫が日向に集まり日向ぼっこするように、何も言わずに礼拝堂に集まって、お弁当を食べた後、寝そべて昼寝をするようになった。建築で気持ちいい空間をつくれれば、人が自ずと集まる状態をつくることもできると気づかされた瞬間であった。

宇都宮のハウス

宇都宮にある東京ガスの実験住宅。地上3.5mに浮いた半透明の屋根がある平屋。半透明の屋根は、透明な部分と半透明な部分の2つのゾーンがある。半透明な部分は、半透明な断熱材がはいっており、ベース照明のようなぼんやりした光が入る。透明な部分であるトプライトからは、特定の場所、特定の時刻に強い光が入る。強い日差しで目を覚まし、数時間経つとキッチンを照らし、その光に近づくとお昼ごはんの時間になる。天井の構造物の梁は、住宅に対して斜めとした。換気のため軒下から風をいれると、半透明のルーバーの天井がすごく揺れる。天井自体が刻一刻と変化している。建築が、体内時計を整えたり、身体を治療できるのではないかと考えた。現代でも、近代住宅の思想のままつくられている住宅は多い。機能主義により、場所、季節、天候や時刻にかかわらず同じ生活をおくることができ、外界と一切触れない人工環境になっている。昼夜逆転する人は、その人の生活習慣に問題があるかもしれないが、それをそそのかすような空間になっている。そこで、私は機能主義、便利主義というものがあるなら、治療主義と名づけ、便利だけでなく、暮らすだけで健康になり、身体が修復されるような住宅を目指した。

2-3. Not only large numbers but also many varieties

ベルリン計画からもわかるように近代的な思想では、種類の数を減らして大量生産をすすめてきた。しかし、現実はその反動で、新宿駅前のようにビル、広告、車、駐輪場、人などの種類は増えつづけ醜悪な景観となっている。ものの数だけでなく種類の数が増えたときにどう風をデザインをコントロールするのが課題である。

URBAN PLANNING AT IMABARI-PORT

今治港の整備のプロジェクト。敷地は城下町のグリッドに載らない埋立地の港湾。船に行くためのコンコースと駐輪場を設計した。コンコースは、上部の三角屋根の部分が木造のHPシェルで本来の今治の城下町のグリッドにのるように9度程角度をつけた。足元は鉄骨造で、近代都市のグリッドにあわせている。駐輪場は、長さ20m、両端に入口を設けた。よくある駐輪場は出入口付近に自転車が溜まり機能せずゴミ捨て場のようなモノが多い。そこで内部をトプライトで1.8mごとに区切った。船のダイヤが30分に1本くらいなので、次の船まで光の位置が動く。

すると利用者は鍵を指したりするのに明るさが必要なので、自然と光の真下に自転車を停める。出入口付近に自転車が折り重なることなくばらけて埋まり、種類は多いがコントロールすることができた。

香港上海ビエンナーレ

香港上海ビエンナーレの指名コンペのインスタレーション。香港と深圳は30分くらいの距離にあり、都市ビエンナーレが開催されている。香港では、竹・丸太・パイプの3種類の足場を使ってピラミッドを設計した。深圳では完全な球体を設計した。どちらも上に登っていくと、くつろげるソファがあり、リラックスしてひとりで都市の風景をながめることができる。中国はどこを訪れても人が多いので、一人になれる場所を提案した。

3.担当学生考察

我々は事前学習で西沢先生の思想や建築作品を分析するにあたり、「現代都市のための9か条」「木造進化論」という主に2つの論考をもとに、運営メンバーによる読解と議論を行った。建築と都市の両分野に精通されていることから、建築を俯瞰して捉えるマクロな視点に着目し、西沢先生の講義を拝聴した。

「現代建築のつくり方」という演題で行われた講義の中で、近代都市、近代建築を相対化し、大きな時代の流れの中で「現代」における建築の役割を捉えている点が印象的であった。また、実際の建築作品の中にも、そうしたマクロな視点が内在しているように感じた。例えば、合併する砥用町の新たなアイデンティティとなる「砥用町林業総合センター」や、沖縄の都市環境を建築内部に取り込む「沖縄KOKUE-IKAN」などでは、長期的かつ広域的な視点で建築をつくられていた。

加えて、西沢先生のつくる現代建築はミクロなスケールで私たちの身体に働きかける。自然光の軌跡を用いて住民の生活リズムを整える「宇都宮の住宅」や、光のスリットの移動により自転車が整然と並ぶ「今治港駐輪施設」など、建築操作により人間の新たな行動が誘発されていた。特に壁やスラブなど建築の層をパラメトリックに操作することで、今までの建築にはない「魔術的」な効果を生み出していた。

時代の変遷や都市のスケールから建築の役割を俯瞰するマクロな視点と、人間の身体や微視的な環境に変化を与えるミクロな視点とが合わさることで、近代にはなかった新たな魅力を持つ「現代建築」がつくられていた。こうした多様なスケールの横断の中に、私たちが「近代」を乗り越えるための活路が見出せるのではないだろうか。

(文責: 延近佑澄)



西沢先生と神戸大学の担当学生、教職員での集合写真